

第一六回

他の追従を許さないアフリカ関係の蔵書・学術雑誌のコレクション

吉田昌夫

アジ研の図書館は、サハラ以南のアフリカに関する資料を所蔵する図書館として、その資料の豊富さと整理の綿密さ、さらに閲覧システムが利用者にとって親切で、使い勝手のよさという点で際立っており、日本の大学図書館の追従を許さないといってもいいほどである。このようなシステムづくりは、図書館スタッフの長年にわたる努力と蓄積のたまものである。特にアジ研創立当初に、このシステムづくりに貢献された中村弘光元図書資料部長が、その基を築いたものだと、私のようなアジ研のオールドタイマーは理解しており、何事もよい土台があれば、のちの新しい技術発展にもよく対応できることがわかる。

最近急速にインターネットが普及し、アフリカについても現地の主要な新聞に出ている大きいニュースは自宅でも読めるようになってきた。しかしそれは時局を追うことには好都合でも、長期的な趨勢を読み取る分析力を養う事はできない。このような力は、やはり単行書や論文を読み込むことによって養われ、研究者の思考が鍛えられ、参考となる考えや事実を知ることによって、自らの独創力を作り出すことができるようになるのだと思う。

アフリカに関しては、私が研究を始めた一九六〇年代頃、サハラ以南アフリカの歴史書はほとんど欧米の学者の手になるもので、アジ

研図書館にもそのような、今では古典的といえるような歴史書はかなり良くそろっていた。私が最初に研究テーマとした東アフリカ農業物流通史に関していえば、K.M. Stahl の "The Metropolitan Organization of British Colonial Trade" 1951 という、イギリス商社のアジア、アフリカにおける農産物流通活動を分析した研究書が入っていて、この本があったからこそ、これを私の初期の研究のガイド役として研究を進めることができたのであった。このころからアフリカ人の研究・執筆になる研究書も増えてきた。この時代の空気は、「アフリカの問題はアフリカ人によって書かれなければならない」というもので、アジ研のアフリカ研究員たちは、海外派遣員として現地生活を過ごす間に、そのころから続々とケニアのナイロビなどにできた現地出版社の新しい出版物に掲載されたアフリカ人研究者の研究成果に触れ、また持ち帰ることができるようになった。

サハラ以南アフリカの経済と人口に大きなシェアを占める農業に関して、最も重要なテーマといえるのが、農村開発と、それに大きくかわる土地制度の問題である。しかしこの分野は、小規模農業を中心とした家族農業を主体とした分野であって、慣習法が中心的な規範を持ち続けている。私自身の研究も、しだいに現地で農村調査ができるようになってから、農村開

発問題に取り組むようになった。しかしこのテーマは、地域別の特徴がアフリカでは強くあり、一般的な学術書ではなかなか扱えない現地の慣習が大きな役割を占め、文化人類学的、あるいは社会学的な個別調査によって、ようやく理解できるような分野である。最近では日本人研究者が欧米の研究者に伍して、アフリカ農村の現地調査ができるようになったが、まだその成果発表の機会は少ない。こうした多様性という特性と、日本におけるこの分野の研究発表の場の少なさから、どうしても欧米で出版される学術誌に目を通すことが、研究動向を知るためにも必要である。

アジ研図書館の強みは、質の高いアフリカの農村開発あるいは農村問題が数多く発表される欧米系の研究誌（そのほとんどは季刊で、英語ないしはフランス語で発表）をほとんどすべて収集し、記事索引を取った後、ただちに利用者の閲覧に回していることである。アジ研図書館で開架式の棚に置いている学術誌は、「Africa」、「African Affairs」、「Journal of Modern African Studies」、「African Studies Review」、「World Development」などの他に、「ラディカルな農村分析の多」"Journal of Peasant Studies" や "Journal of African Political Economy" も含む、すぐ手にとれる。

アジ研図書館では、以上のような主な研究誌の論文は、OPACで検索できる。このような資料を自由に閲覧できる図書館は他にはなく、私はいまだに頻繁に利用をつづけている。（よしだ まさお／「特活」アフリカ日本協議会）